

教への庭から

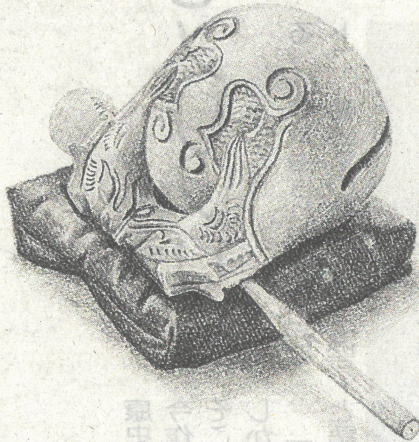
般若心経は心の杖

出雲市斐川町・仁照寺住職 江角 弘道

た。私も幼少期に般若心経を覚えて、読み続けていますが、「人間、何のために生きるか」という問いこそは、24歳の時に、一大決心道を求める問いなのです。して研究分野を転向したとこの問いが、生活の大部分を占めたため、研究もな

死することを考えたりして、精神はボロボロの状態でした。そのような時期に、私の様子を見えてきました。母の勧めで参加した坐禅会で、一畑寺で安居会という宗門の坐禅会をやっているから、ぜひ参加しなさい」とも感謝しています。

江角弘道は、日本中の文献を網羅した『群書類従』全670巻を完成させるという大仕事を、盲目の埴保己一（1746～1821年）は、成功させました。彼は41歳の時、事業の成功を祈って北野天満宮へ参拝して、これから般若心経を毎日100回ずつ読みますと誓ったそうです。そして74歳の時に、『群書類従』は完成するのですが、その時までに見た回数合計120万回以上に相当します。



挿絵 平尾恵郷

9月23日の本紙「こたまり」欄に掲載された投稿「亡き父思い覚えた般若心経」は、投稿された方が小学2年で、父を亡くして立ち直れなかった時、母から毎朝般若心経を唱えること、暗記することを勧められ、それを実行。幼少期に覚えた般若心経を毎日唱える生活は、その後の人生で、不幸や苦難に出合っても、般若心経が寄り添ってくれて、生きて行く心の杖となっていて、という内容でした。

この投稿を読み、小学生の子に般若心経を毎日唱えることを勧めた母親は、本当にえらい人であり、子ども素直な子だと思いました。さらに、般若心経を日々の生活の中に取り入れることの大切さを思いまし

究ができないことから、「人も手に付かない状態が半年間、何のために生きていますか」という大きな疑問だろう」という大きな疑問は、友人と遊んだり、話しが内面から浮かんで、たりが苦痛になり、生きてこれに毎日、対処しなければならぬ、研究は全

死することを考えたりして、精神はボロボロの状態でした。そのような時期に、私の様子を見えてきました。母の勧めで参加した坐禅会で、一畑寺で安居会という宗門の坐禅会をやっているから、ぜひ参加しなさい」とも感謝しています。

江角弘道は、日本中の文献を網羅した『群書類従』全670巻を完成させるという大仕事を、盲目の埴保己一（1746～1821年）は、成功させました。彼は41歳の時、事業の成功を祈って北野天満宮へ参拝して、これから般若心経を毎日100回ずつ読みますと誓ったそうです。そして74歳の時に、『群書類従』は完成するのですが、その時までに見た回数合計120万回以上に相当します。

般若心経は、繰り返し唱えることで、苦難から解放されること、自らの夢を達成することができるなどの「お経」の力があると確信しています。